Edgar A. Poe の文学的環境について

江　口　裕　子

Poe は 1838 年から1844年までを Philadelphia で、それ以後 New York に居を移して晩年の五年間をすごしたほかは、Richmond、Charleston、Baltimore など主として南部に根拠をおいて文筆活動を行なっている。

Richmond はいうまでもなく Poe が Allan 家に引きとられてから多感な少年期の十数年を送った彼の故郷ともいうべき町であり、また後日 *Southern Literary Messenger* 誌の編輯者となり、magazinist として、また新進気鋭の批評家として文壇を瞠目せしめるようになった土地である。Allan 家を出奔した後の Poe は、Edgar A. Perry と変名して軍隊に入り、1827年の秋から翌年の冬にかけて、Charleston 港 Salivan 島にある Moultrie 要塞に勤務している。この期間はわずか一年そこそこであったが、 myrtle が常時繁茂し、潮騒にあけくれするこの Salivan 島や Charleston を中心とする South Carolina の自然や風物が Poe の心に忘れがたい印象をのこしたことは想像にかたくなく、後日、傑作 *The Gold Bug* に霊感をあたえることとなった。さらに Baltimore は叔母の Clemm夫人の家を唯一の寄寓先として、ほそぼそながら作家としての第一歩をふみ出した町。ここで彼は1829年、1831年版の両詩集およびいわゆる *Tales of the Folio Club* と称する一連の短篇を世に送って、*MS. Found in a Bottle* によって週刊 Baltimore *Saturday Visiter* による懸賞募集作品の第一位を獲得し、はじめて短篇作家としての地歩をきづいた。晩年愛妻を失い、New York の生活に嫌厭を感じ出した Poe が再起の地として目をむけたのは南部であり、二十有余年の遍歴の出発点 Richmond であった。Magazinist としての彼の生涯の念願は、地方的色彩をもたぬ、国家的な、いな願わくば、"世界を舞台とする" ような雑誌の編輯者たらんとすることであった。しかし、いく度びかつかみかけた機会も大方は飲酒癖と不安定な性格がたたって長蛇を逸する結果となり、また一方では、論敵の多い北部で有利な地盤を得ることに見切りをつけた彼はふり出しの Richmond にもどって、雑誌刊行の支持を求めようとしたのであった。Poe の New Yorkでの作家生活は決して安楽な幸せなものだったとはいえないが、当時のアメリカでは本来の地盤をはなれて北部に進出し、優勢な New England や New York の文人らと覇をきそうた南部作家は、おそらく Poe を

もって嵩矢とするのではなかろうか？

Poe は前々号記載[1]の論文でも述べたように、気質や生活習慣にも南部人的な特長を多分にもっており、また社会的政治的な見解からいっても南部一般の傾向を支持することが多かったのは事実である。従って Poe を南部の sectionalist であり、それ故に New York や New England の文壇人に対して偏狭な敵愾心を向けたのだと見る向きもあるが、その説に私は賛同しかねる。Poe にはなるほど偏見や近視眼的見解も多くて第一流の批評家とはいい兼ねるが、限界はあっても Poe の批評の根底には彼独自のはっきりした原理があって、それに照らして是非の判断を打ち出したまでであって、単なる個人や党派や、特定の地域を擁護したわけではなかった。たとえば Poe は Griswold の編さんした *Poets and Poetry of America* の批評のなかで、Griswold が New England の作家のみを偏重していると批難しているが、その半面、同じ New England の作家のなかでも Lowell と Holmes とが軽んじられているのは不当であると両人を擁護している。またそうかと思うと、Lowell の *A Fable for the Critics* の中で自分以外の南部作家が全く無視されていることを不満として、

> It is a fashion among Mr. Lowell's set to affect a belief that there is *no such thing* as Southern Literature. Northerners——people who have really nothing to speak of as men of letters,——are cited by the dozen, and lauded by this candid critic without stint, while Legaré, Simms, Longstreet, and others of equal note are passed by in contemptuous silence. Mr. L. cannot carry his frail honesty of opinion even so far south as New York. All whom he praises are Bostonians. Other writers are barbarians, and satirized accordingly——if mentioned at all.[2]

と難詰していながら、同じ批評のなかで Margaret Fuller の攻撃に対して Longfellow と Lowell とをアメリカ一流の詩人として庇っているのである。けだし Poe が遺憾としたのは、北部の批評家の視野のせまさや独善主義が南部その他の地域の作家を無視したり、不当に過少評価していることであり、これらの作家に北部の作家と同じ標準でそれ相応の評価と地位とが分けあたえられる以上のことを望んだのではなかったのだと思う。この点で Poe は南部を地盤とし、南部的見解をも反映しながら、特に南部人にありがちな愛郷心や地方的偏見にわざわいされず、大局の見とおしのきく視野に立って時には南部を擁護し、時には南部一般の非を指弾することも辞さなかった。そして特に南部の歴史や伝統やまた歴史的人物に栄誉をあたえるということをしなかったから、南部は Poe に彼らの代弁者としての敬意をはらうこともなく、彼の芸術の意図や努力をも長く理解しようとはしなかった。したがって、Poe と南部の文学的環境との結びつきについて究明しようとする試みはあまりなされず、Poe は当時の文壇の諸傾向とは無関係な立場

で物を書いていた作家のように思われがちなのだが、はたしてそれは正当なのであろうか？ Poe の青年期の文学精神を培かい、文学修業の地となったのは明らかに南部であり、しかももっとも時流に敏感でなくてはならぬ magazinist でもあった Poe がはたして当時の文壇の傾向に無頓着であり得たろうか？ また彼の作品自体のなかに、あるいは彼の創作の態度や方針なりに当時の文学思潮の影響が見出せぬということがあるだろうか？ これが以下に私の考えてゆきたい点である。

I. Richmond における Poe——Poe と *Southern Literary Messenger*

前記のように Poe は Richmond の Allan 家で 1827 年まですごし、のち 1835 年八月 *Southern Literary Messenger* の編輯にたずさわるため Clemm 叔母と Virginia をともなって、ふたたび思い出ふかいこの町に帰った。Richmond は当時 Charleston と New Orleans と並んで南部のもっとも有力な知的文化的中心地であり、Poe の文筆生活にはもっとも重要な役割をはたしている筈である。Poe の関係した *Messenger* は 1834 年 T. W. White によって創刊された、南部では指導的な月刊文芸雑誌であった。Poe は J. P. Kennedy の厚意によって、1835 年に同誌に寄稿をはじめ、同年八月に White の編輯助手となり、1837 年一月には職を退いている。当時の南部の諸都市における出版事業は困難をきわめ、かろうじて発行の運びにいたった雑誌も財政的に行きづまって、命脈を保つことができないという状態であった。Charleston は "the graveyard of magazines" という不景気な名で呼ばれたほどで、*Messenger* の創刊時は南部には文芸雑誌といい得るほどのものは一つもなかった。このような事実から推しても南部ではいかに一般の文化意識が低調であったか、ましてや文学精神を養成する試みがいかに前途多難であったかがうかがわれるであろう。当時の雑誌には南部の文化的蒙昧をなげき、南部の威信を挽回するような文学の興隆をのぞむ識者の声もしばしば現われたが、George Frederick Holmes の一文はその代表的なものであろう。

> The Southern population have checked and chilled all manifestations of literary aptitudes at the South; they have discouraged by blighting indifference, the efforts of such literary genius as they may have nurtured : they have underrated and disregarded all productions of Southern intellect; and now, when all the batteries of the literary republic are turned against them, and the torrent of literary censure threatens to unite with other agencies to overwhelm them, it is in vain that they cry in their dire neccessity, "Help me, Cassius, or I sink."[3]

Messenger の出た 1830 年代は奴隷解放問題から次第に南部と北部の間に分裂のきざしが見

えはじめていた頃でもあり、同誌は南部の雑誌の例にもれず南部主義のつよい雑誌であった。創刊号では White の言によれば「南部の誇りと天才とを鼓舞し、長い惰眠から我が国の、この地域の文学的努力を目ざましめる云々」[(4)]の趣旨をうたっている。この編輯者の記事とともにW. Irving、J. F. Cooper、J. P. Kennedy、J. K. Paulding、J. Q. Adams、P. A. Browne 等による激励の手紙が第一号をかざっている。

初代の編輯長 James E. Heath はこの第一号に「南部の文学」と題する一文をのせて南部の文学意識の覚醒、南部文学の北部からの独立を次のように奨励している。

> Hundreds of similar publications〔literary journals〕thrive and prosper north of the Potomac, sustained as they are by the liberal hand of patronage. *Shall not one be supported in the whole south*? . . . Are we to be doomed forever to a kind of vassalage to our northern neighbors——a dependance for our literary food upon our brethren, whose superiority in all the great points of character, ——in valor——eloquence and patriotism, we are no wise disposed to admit?[(5)]

Poe が二代目の Sparhawk のあとを引きついで事実上 *Messenger* の編輯者となったのは1835年の十二月と見なしてよい。同年三月に *Berenice* が掲載されたのをはじめとして、この頃から次々と Poe の短編が *Messenger* 誌上に現われはじめた。十二月号には *MS. Found in a Bottle* と *Scenes from an Unpublished Drama*〔*Politan*〕に加えて、例の物議をかもした Theodore S. Fay の *Norman Leslie* に対する批評が含まれており、Poe の南部文壇への颯爽たる登場をもの語っている。以後 *Messenger* の批評欄はすべて Poe の担当するところとなり、辛辣人を刺すごとき彼の批評は南部のみならず、アメリカ全土の読者の注目を *Messenger* にあつめるようになった。この体裁内容ともに面目一新した十二月号は近来まれなヒットだったらしく、各紙から讃辞が寄せられた。Poe はすかさず翌年一月には八頁から成る *Supplement* を出して *Messenger* におくられた讃辞を掲載して同誌の宣伝につとめ、さらに四月にも七月にも *Supplement* を出している。The Richmond *Whig* 紙は

> Mr. White's *Literary Messenger* is either the most transcendently able periodical in the United States, or its proprietor has been most particularly successful in eliciting the puff——for it attracts more of the notice of the Press, and is more uniformly admired and praised upon the appearance of its successive numbers, than all the Literary Periodicals in the United States put together. The *North American*, 〔*sic*〕 *Quarterly*, &c. are comparatively lost sight of. It is universally noticed——not only in the newspaper press of the great towns and cities, but in the obscurest village sheet throughout the land. As Virginians and Southrons,

solicitous for the honor of Southern Literature, we are proud to believe that this extensive favor bestowed upon the Messenger, flows from its deserts, an opinion confirmed by our personal knowledge of its enterprising, esteemed and modest proprietor.[6]

と *Messenger* の進出ぶりを祝っているし、The Norfork *Herald* は

To use the words of a Northern contemporary "it has done more within the last six months to refine the literary standard in this country than has been accomplished before in the space of ten years."[7]

という讃辞をおくっている。

Poe は尖鋭な批評欄によるのみならず、雑誌の編輯の上でさまざまな斬新な趣向をこころみた。たとえば知名の諸家の自筆による署名を複写したものをあつめた *Chapter on Autography* の記事をのせるとか、当時町の話題となっていた Maelzel 氏の chess-player の謎を解いたりして、いわば読者の興味のつぼにあたる点をよく心得ていて、*Messenger* の売れゆきをたかめることに成功している。このような俊敏な Poe の編輯ぶりによって、*Messenger* の予約者の数は在職十五ケ月の短期間に七百部から五千部（Poe 自身の言によれば七百部から五千五百部）に増加したといわれる。これによっても Poe が機をみるに敏、人の意表をつく、才気煥発な magazinist であったことが想像され、このような実務家としての Poe の一面を知るにおよんで、彼が時の動きに無関係であったという批評は容易に撤回されるはずである。

このような才幹の閃きをしめしながら、Poeは一年余ののち、即ち1837年一月には *Messenger* の編輯者を退いてしまった。この原因はおそらく待遇に関する不満からだったらしい。経営者 White は Poe の才能をみとめはしたものの、彼に *Messenger* を統率する権利まではあたえなかった。一方自分自身の主宰する雑誌をもちたいという野心のあった Poe はおかかえ編輯者の地位に甘んじることを好まず、かつ又 Poe の経済上の不如意もいっこう解消しなかったことなどが主な原因であったと思われる。

Messenger は南部の指導的な雑誌として1860年まで継続したが、これとならんで南部で比較的長く命脈をたもった有力誌に、Charleston の *Southern Quarterly Review* と New Orleans の *De Bow's Review*、Baltimore の *Emerald* と *Savannah Magnolia* などがあった。これらの文芸機関誌、なかんずく *Messenger* はヨーロッパの新文学思潮を南部に導きいれるのに大きな役割をはたしたのである。

II. 十九世紀前半の南部文壇の動向

1822 年の対英戦争と 1861 年の南北戦争という二つの戦争にはさまれた半世紀は Aaron の杖

にもおとらぬ数々の不思議を行なった時代であった。アメリカにはヨーロッパを席捲していたローマン主義思潮の波が大西洋をこえて流れこんでいた。この新思潮はアメリカの北部でははとんど何の抵抗もなく受け入れられ、New England では Scott、Byron、Carlyle、Coleridge、Dickens、Schiller、Goethe 等の作品がもてはやされ、Saint-Simon や Fourier のローマン的社会主義に刺戟されて社会改革の気運がみなぎり、哲学、宗教、教育、文化すべての分野はローマン精神の洗礼を受けざるはなく、文芸の面では Cooper、Irving、Longfellow、Emerson、Hawthorne、Melville 等の作品のなかに花をひらいた。しかし、南部におけるローマン主義のうけ入れ条件は北部とはややことなっていた。

一般的にいえば、南部のもつ自然的人種的条件はローマン主義をうけ入れるには、北部よりもむしろふさわしいものであったといえよう。自然的条件についていえば、南部における戸外生活に適した広大肥沃な原野と、八十度から九十度におよぶ高い気温、一年のうち地域によっては六ケ月乃至九ケ月にもおよぶ長い夏季、終日を通じて地上にこめ、視野をかすませるもやや霞、自然の色彩のゆたかさ、そのような風土気候は概して苛酷な労働やきびしい思索から人々を遠ざからせ、彼らの生活をとかく安逸と享楽とにみちびく。そして現実を逃避して夢想を愛する傾向をやしない、過去の追憶にふけり、未来の夢を追うといったローマン的気質をそだてる。Cash は南部人の気質におよぼす自然の影響について次のように述べている。

> Moreover, there was the influence of the Southern physical world——itself a sort of cosmic conspiracy against reality in favor of romance. The country is one of extravagant colors, of proliferating foliage and bloom, of flooding yellow sunlight, and, above all perhaps, of haze. Pale blue fogs hang above the valleys in the morning, the atmosphere smokes faintly at midday, and through the long slow afternoon cloud-stacks tower from the horizon and the earth-heat quivers upward through the iridescent air, blurring every outline and rendering every object vague and problematical . . . .
>
> The dominant mood, the mood that lingers in the memory, is one of well-nigh drunken reverie——of a hush that seems all the deeper for the far-away mourning of the hounds and the far-away crying of the doves——of such sweet and inexorable opiates as the rich odors of hot earth and pinewood and the perfume of the magnolia in bloom——of soft languor creeping through the blood and mounting surely to the brain . . . . It is a mood, in sum, in which directed thinking is all but impossible, a mood in which the mind yields almost perforce to drift and in which the imagination holds unchecked sway, a mood

in which nothing any more seems improbable save the puny inadequateness of fact, nothing incredible save the bareness of truth.[8]

この非現実的傾向とローマン精神、そしてまた享楽と懶惰への傾向はあきらかに南部の自然が人々の血肉のなかに忍びこませた南部固有の性質であった。

さらに南部人を構成する人種についていえば、全体として英国人が多いのは当然のことながら、中でもスコットランド人およびスコットランド系アイルランド人が多く、彼らは Pennsylvania から旧南部の内陸地方に進出した。さらに十八世紀から十九世紀にかけて、ドイツ系移民が Virginia、Carolina 等に移りすみ、South Carolina、Georgia にはフランスのユグノー、アイルランド系旧教徒、ユダヤ系ポルトガル人、Louisiana 辺にはフランス人とスペイン人の子孫クリオール人が住んでいた。これらヨーロッパを故郷とする多くの移民たちの中には夢幻と神秘への傾向をもつケルトの血が流れており、ローマン主義思潮に敏感に反応し、これを吸収するに適した気質をもった人々であった。

さらに社会的条件からいえば、大農園制度と奴隷経済の上に成り立った南部の文化をになう唯一の知識階級は planter たちであった。当時の南部では yeoman や poor white の間にはほとんど読書の習慣はなく、planter といえど New England の Brahmin と匹敵しうるような知識階級ではなかった。一般に文学は気ばらしか娯楽の一種にすぎず、芸術のための文学でもなければ、人生のための文学でさえなかった。しかし planter たちは多かれ少なかれ農園と奴隷を所有し、"南部紳士" の伝統のなかで育った人々であったから、いつの間にか自分たちを十七世紀イギリスの Cavalier の子孫と思いなし、封建領主に似た特権意識をもつにいたった。そのような人々の心中には中世の騎士や騎士道があこがれの対象として潜在していたであろうことも十分想像がつく。Scott の歴史小説が他の作家を凌いで南部でもてはやされたのも、planter たちの中世趣味や国家主義的感情にアッピールする所があったからであろうし、また、三十年代四十年代にいわゆる Cavalier 伝説が盛んになったことも、Scott の小説や、その他の騎士道伝説が南部で愛読されていた事実と決して無関係ではなかったと思う。

南部の読書階級は政治経済思想の面でも保守的な立場をとる傾向が北部よりつよく、現存の社会秩序や道徳的基準をみだすような文学にはきわめて不寛容であった。したがって、南部ではかならずしも北部と歩調をそろえて旧大陸の新思潮を吸収同化しようとはせず、この風潮のすべてが自国の風土に適するかどうかについて疑惑と警戒の色を示し、精選主義の方針をとった。同じローマン主義を母胎としながら北部を風靡した各種の社会改革運動などは、旧い制度慣習を理想的なものと考えている南部の人々のなかには浸透する余地がなかったのである。文芸の面でもローマン主義の歩調はやや立ちおくれ、前時代の新古典主義は北部より南部に長く残っており、1830年頃になるまで十八世紀の古典が尚ひろく読まれていた。Pope、Swift、Dryden、Addison

あるいは Gray、Cooper 等の人気はまだおとろえず、批評の基準となったものはイギリスの季刊や Blair の *Rhetoric*、Archibald Alison の *Essay on the Nature and Principles of Taste* のごときもので、Coleridge、Hazlitt、De Quincey など新時代の先覚者の批評におとらぬ勢力があった。Byron の人気が南部で長く持続した原因の一つは、ローマン主義勃興の気運によるものとはいえ、他方では Pope を支持する彼の文学上の保守主義が南部人の好みに投じたためでもあろう。

このように南部におけるローマン主義は、十九世紀初期において尚新古典主義の尺度を守っていた批評家の検閲に触れない性質のものであり、したがって南部的な限界をもったものであった。ローマン主義が南部で真に実を結んだのは十九世紀も半ばのことであり、初期のローマン作家 Poe、Kennedy、Simms らのなかにはまだ新古典主義の余映が尾を引いているのである。

III. 南部におけるローマン作家の popularity と Poe

第一章においてのべたように、ローマン主義を南部に輸入するのに重要な役割をはたしたのは *Southern Literary Messenger* をはじめ *Southern Quarterly Review* や *De Bow's Review* などであるが、1830 年代から 1860 年代にかけてこれらの諸雑誌にあらわれたローマン主義の傾向はといえば、先ず詩の *Byron*、*Moore*、小説の Scott の流行をあげねばなるまい。ローマン主義の焔のなかに自ら身を投じて時代の殉教者となった Byron への傾倒は全ヨーロッパを風靡していた。文学青年はこぞって Byron 熱にうかされ、文学上の影響はもとより、生活態度、挙措動作、服装にいたるまで Byron 風をきどり、黒いマントに身をやつし、額に長髪をうず巻かせ、貴族的な傲岸さと孤独を身辺にただよわせ、憂うつとアンニュイになやむポーズ、そのような Byron 型青年はたしかに時代のシンボルであった。

アメリカ本土における Byron 熱は南北を問わずさかんだったが、南部では、たとえば、*Messenger* の存続した約四十年間、その詩欄は Byron に寄せる sonnet や Byron ぶりの詩が圧倒的に多かった。G. W. Landrum の調査によれば、1844 年以前の地方新聞 Enquirer 紙上に Byron の詩で飜刻されるもの六十をかぞえたということである。[9] また Poe が籍をおいた Virginia 大学の所在地 Charlottesville のさる書店の記録によれば、当時学生の間でもっとも人気のあった詩人の筆頭は Byron、これに次いで Thomas Campbell、Thomas Moore の順であったといい、Byron の詩集は他の作家の本一冊に対して五冊という売れゆきを示したという。また 1823 年の Richmond *Enquirer* は "If the number of British poets were reduced to three, they would present a rare and admirable combination---Scott ---Byron ---and Moore."[10] とのべている。話を転じて Poe とこれらの作家との関係に言及すれば、

このような風潮のなかで育った少年詩人 Poe が Byron や Moore の影響をうけなかったとは考えられない。Virginia 大学の寮の部屋の天井に、Poe は Byron の詩集の挿絵をかきうつしたことがあると、ある伝記はつたえている。[11] 南部紳士の貴族的なほこり高さと孤独癖をもっていた Poe が少年の頃には Byron の影像を自分の上に映し見ることもあったにちがいない。アイルランドの詩人 Moore の人気は Richmond や Baltimore で殊にさかんで、*Messenger* や *Emerald* 紙上には、Moore の *Ode of Anacreon* や *Irish Melodies*、*Lalla Rookh* 等の詩がさかんに引用された。Byron も Moore もともにアメリカにギリシャ讃美の風潮をもたらした詩人であるが、1828 年五月十日の *Emerald* は Moore の *Evenings in Greece* を全頁の四分の一をさいて、二回にわたって連載したが、同紙はアメリカでこの詩が全部紹介されたのはこれが最初であることを誇りとした。このことは単に南部における Moore の人気の高さによるのみならず、この詩が当時のギリシャブームの風潮にかなうものだったからである。この古代復興の気運は南部では特に Virginia や Maryland に濃厚であり、当時の詩、絵画、又は建築様式などのなかに顕著にあらわれている。（当時の大きな建築、学校、官衙、教会、邸宅などドリア式、コリント式などの portico のある建築が今日でも多数のこっている。）Poe の初期の詩や短篇に Byron や Moore の影響が見られることは Poe 研究家の指摘する通りである。第一詩集の標題となった *Tamerlane* は恋と野心と美と死とをうたった主題から見ても、人物から見ても、また詩のスタイルや情調の点からも Byron の模倣のあとがあきらかであり、特に *Giaour* や *Manfred* から暗示をうけたと思われる詩行が諸処に見いだされる。習作的な短篇 *Assignation* や *Silence, A Fable* の主人公の風貌は Byron をモデルとしたとしか思えない。事実前者の題材は Byron と Guiccioli 伯爵夫人との情事にヒントを得たものと推定されている。絶唱 *To Helen* はギリシャ的なイメエジにみちており、*Assignation* の中の侯爵夫人 Aphrodite の描写は Helen のイメエジをこの短篇のなかで敷衍したものと思われる。この作品を書いたときの Poe の脳裡にはおそらく恥じらいがちにたたずむ美の女神 Venus が理想像として彷彿していたにちがいない。初期の詩 *Spirits of the Dead* は Byron の *Manfred* から材料を借用していることは明らかであり、*A Dream within a Dream*、*Romance*、あるいは後期の詩 *The City in the Sea*、*Coliseum* などにも Byron の影響がうかがわれる。

Poe に対する Moore の影響は、初期の詩 *Al Aaraaf* には *Lalla Rookh* のイメエジを多分に借用しているし、*Israfel* は *The Light of the Haram* と *Fire Worshipper* が暗示をあたえていると推定されるが、その影響関係のある着想やイメエジが東洋的なものである点が注目される。

小説の方面で南部に圧倒的な人気のあったのは Scott であり、ついで三十年代から四十年代にかけて広範囲な読者層をかち得たのは *The Last Days of Pompeii* の作者 Bulwer-Lytton

であった。Scott の *Waverley Novels* はアメリカでは最初のベストセラーとなり、1813年から、1833年までの間に五百万部の本がアメリカの出版社から出まわったといわれるが、特に Mason-Dixon line 以南の地域は出版社にとって絶好の市場となり、Scott の小説は北部の出版元から貨車で南部へおくり出されたという。Scott はアメリカの南北を問わず "小説界のShakespeare" といわれるほどの人気を得、読書階級の家の書棚に彼の小説本が見いだされぬ所はなかった。それほど彼がアメリカ人に親しまれたのは、おそらく1812年の対英戦争後国家意識がたかまって、国民的文学の要望がさかんとなっていたアメリカに彼の歴史小説がそのモデルを提供したからであろう。しかし北部では Scott の人気は1870年代までには下火となり、Dickens、Thackeray、Bulwer-Lytton らにその地位をゆずっている。南部において彼の影響が他の地域以上に長くおとろえなかったのは、Byron とはちがった意味で、planter の生活感情に訴える要素があったからであろう。Scott の小説は支配階級と奴隷階級の存在を容認している南部の人々をとまどいさせる性質のものではなく、また過去の栄光をうたう彼の小説が、"南部紳士" の伝統のなかに育って、すでに彼ら自身の名誉心や忠誠、隣人への友誼、婦人への礼譲等のほこりある戒律をもっていた planter のなかに中世趣味や騎士道精神を助長し、それに栄光を添える役目をしたといえるであろう。R. G. Osterweis は Scott の小説の南部に及ぼした影響について次のように述べている。

> The theme from Abbotsford, then, was the glorification of the chivalric ideal, with its emphasis on the cult of manners, the cult of woman, the cult of the gallant knight, the loyalty to caste. Adjusted to local environmental features and reenforced by other "culture carriers," this imported notion was to emerge as the Southern cult of chivalry. In slightly differentiated forms, it permeated the several areas of the antebellum South. Virginia planters knew it as an all-pervading way of life. Carolinians flaunted the chivalric badge as the proud emblem of Southern nationality. In New Orleans, the cult had a flavor of joie de vivre. Along the Southwestern frontier the trappings of chivalry were cherished in a fierce, possessive, often crude fashion.(12)

Scott と Poe との関係に言及すれば Poe がこのような Scott の流行に影響をうけた形跡は見うけられない。Poe の Scott の詩への言及も数回にとどまっていて、Scott の詩よりはむしろ小説の方に関心があったらしいが、Scott の得意とする歴史小説の分野に進出する意図はなかったし、一方 Scott は Poe がその流行に貢献する所の多かったゴシック小説の怪奇と戦慄を得意とする作家になるにはあまりに温健でありすぎたようである。もっとも Scott は *Waverley Novels* の序文のなかで "I had nourished the ambitious desire of composing a tale of

chivalry, which was to be in the style of the Castle of Otranto, with plenty of Border Characters, and supernatural incident." といって、ゴシック小説を書く意図を表明しているが、結局ゴシックの真髄は Scott とは異質のものであったらしく、のちには". . . to take horror too seriously was to confuse life with delirium, to become like Coleridge too mirky and opaque, or like C. B. Brown unhealthy."[13] と考えざるを得なかった。この点について Arthur Fiedler は "The notion of converting the terror of Germany to a terror of the soul (the phrase is Poe's, but the ambition was Brown's, too) would simply not have occurred to Scott, in whom the terror of *Stürm und Drang* was converted from nightmare into stage-effects, from pathology into entertainment."[14] と述べているが、この言葉は Scott と Poe との芸術的な資質と目的の相違をあきらかに語っている。小説は結局 Scott にとっては上品で、教育的で、ぜいたくな娯楽にほかならなかった。そしてそのような見解は Poe のきびしい芸術観とは相容れるべくもなかったのだ。 Poe の Grotesque と Arabesque の物語を生み出す源泉となった "魂の恐怖" が Scott の心に忍び入るには、彼自身があまりにも健康的であり、またあまりにも多忙な公的生活をもっていたのである。

これまでに述べた Byron、Moore、Scott の三大作家に比べると、他のローマン作家の受け入れはこれほど迅速でも華々しくもなかった。Wordsworth、Shelley、Keats、Coleridge らの新詩風が、一般読者の認識をうるのには暫しの時を要した。前にも述べたように彼らの頭はまだ新古典主義の批評の規準から抜けきることができなかったからである。Shelley はその急進思想の故に無条件には受け入れられず、特に私生活上のスキャンダルのために南部では排撃の傾向がつよかった。が Poe は詩人としての Shelley の資性を的確に評価しており、詩の雰囲気や情調の点で Shelley に学ぶ点が多かった。

Coleridge と Carlyle とは北部の社会改革運動の原動力となった超絶主義を輸入した思想家であり、北部ではかなりの影響力をもっていたが、Byron や Scott の人気に匹敵すべくもなかった。 Coleridge の *Biographia Literaria* は南部でかなり広く読まれはしたが、詩人としての彼に対する読者の関心は冷やかであった。Carlyle も南部で認められるのはやや遅れたが、1840 年代の Virginia や South Carolina における彼の影響力には侮るべからざるものがあった。 Poe に及ぼした Coleridge の影響については何人も疑義をはさむ余地はないが、 Poe が Byron や Moore から学んだのは初期のころだけで、批評や思想の点でより恒久的な影響力のあったのは Coleridge である。Poe と Coleridge とはすぐれた想像力と論理性とをそなえていた点、一般法則化の傾向、詩の音楽性、韻律や構造に関する理論などにおいて多くの共通性が見出される作家であるが、Poe が初期から中期にかけて Coleridge にふかい敬意と関心を抱き、彼の思想に負う所が多かったことは、1831 年版詩集の序文をなしている *The Letter to B*——

をはじめ、Poe の著作の諸処に見出される Coleridge への言及が三十回に及んでいることによっても明らかである。特に Poe は *Biographia Literaria* を読んでその学識のふかさに打たれたが、これが Poe 自身の作詩に関する理論の根底をなしていることも周知の事実である。Poe は 1836 年以後は Coleridge についてあまり讃辞を呈しなくなっており、彼から受けた影響をみとめたがらぬ傾向が現われてきている。これはおそらく、自己の才能に対する自信や、年と共に昂じていった独創性に対する異常な執着がそうさせたのであろうか。Poe の初期の詩 *To Helen* には Coleridge の *Youth and Age* の詩行がひびいているし、*The City in the Sea* は情調やスタイルの上で *Kubla Khan* に源泉を見出すことができる。また *Sleeper* の詩行は *Christabel* のそれに通じ、*The Raven* の詩韻は *The Ancient Mariner* に負うなど、Poe におよぼした Coleridge の影響については尚考察の余地が多く残されている。

Carlyle については、Poe は批評のなかで頻繁に Carlyle の名を引きあいに出し、その度数二十回にも及んでいるにもかかわらず、ついぞ彼のことを讃めたことがなく "I have not the slightest faith in Carlyle. In ten years—possibly in five—he will be remembered only as a butt for sarcasm . . . . The book about 'Hero-Worship' —is it possible that it ever excited a feeling beyond contempt?"[15] というようなあからさまな反感をしめし、彼の英雄崇拝の思想をも毛ぎらいしている。

Dickens は南北戦争前の北部では、読者の人気を一手にさらう感があり、講演旅行をするべくアメリカに招かれたほどであったが、南部の人々は彼に対しては冷やかな態度を示した。大衆を前に彼に礼を欠いたふるまいがあったという理由で、1837 年の *Messenger* に現われた Dickens への批評は次のように侮蔑的なものであった。

> A writer who chooses to be known to the literary world by the name of "Boz" has for some time past been exhibiting his antics before the public. We have never sought his acquaintance for the same reason that we should avoid a fellow who might thrust himself into an assembly room, and invite the notice of the company by the dress and grimaces of a Merry Andrew. We would ask ourselves . . . what man capable of refinement would choose to be a buffoon . . . . Can we be blamed for coming to a somewhat similar conclusion in the case of a writer who thinks proper to announce himself by such a mountebank designation as that of "Boz"?[16]

このように Dickens をしめ出そうとする気運がつよかったにも拘らず、Poe が Dickens の作品をひろく読んでいたことは、彼の *Oliver Twist*、*Nicholas Nickleby*、*Pickwick Papers*、*Master Humphry's Clock* および *Barnaby Rudge* 等の作品に対してそれぞれ批評を

試みており、そのほかにも廿回にわたって Dickens に言及していることを見ても明らかである。Poe の物言う "大鴉"が *Barnaby Rudge* にヒントを得ていることはいわずもがなであるが、1842 年同作品の批評をしたとき、Poe はすでに彼自身の大鴉のイメエジを心の中につくりあげていたのである。彼は Dickens の鴉が一そう効果的であるためには、この鳥に象徴性をあたえ、その啼き声が前兆として響くようにすればよかったのだと述べているが、このイメエジは彼自身の *The Raven* のなかでメフイストテレス的な大鴉となって誕生したわけである。

Wordsworth に関しては、 Poe は *The Letter to B*—— の中でもうかがわれるように、Wordsworth の詩の教訓性にあき足らず、詩に対する意見の相違のため彼を高く評価していないが、Poe の詩の *The Valley of Unrest*、*Romance*、*To* — — — (*Not long ago, the writer of these lines*) 等には Wordsworth の詩の響きが見られる。Campbell は *To Helen* の有名な詩行

To the glory that was Greece
And the grandeur that was Rome.

は Wordsworth の

The Beauty of Florence and the grandeur of Rome.[17]

をモデルとしていると推定しているが、[18] Poe の詩行の最初の形が

To the beauty of fair Greece
And the grandeur of old Rome.

であったことを考えれば、この推定は十分の信憑性をもっている。

Keats に関しては、南部は彼をうけ入れるのに躊躇を示したが、 Poe は美の使徒としての Keats をみとめ高度の讃辞を呈している。 Poe の初期の詩 *Sonnet to Science* の詩節には Keats の *Lamia*、*Al Aaraaf* のなかには *Endymion* の影響が見られる。

以上、当時の南部におけるローマン作家の流行についてはイギリスの作家のみにとどめるが、Poe の彼らに対する評価や好みは必ずしも南部の読書界一般の風潮とは一致しない。 Poe が Wordsworth、Scott、Carlyle などに対して関心が薄く、その半面 Moore の詩の音楽美に感じ、南部の Coleridge、Shelley、Keats らに対する疑惑にもかかわらず、いち早く彼らの詩魂にふれて共鳴するなど、後に詩を the Rhythmical Creation of Beauty と定義して、至上美の探求につとめた Poe の詩精神の淵源と、その成長の道程をほぼあとづけることが出来るように思う。

IV. 当時の雑誌に反映した文芸思潮と Poe との関係

Richmond の有力な雑誌 *Southern Literary Messenger* 誌をはじめ、当時の諸文芸雑誌は

どのような時代の特色を反映していたであろうか？　また Poe はこれらの文芸の動向に対してどのような反応を示したであろうか？　この章では Poe が magazinist として、また批評家として広く内外の新刊書や雑誌に目を通していて、当時の文学界の趨勢にも通暁していたこと、彼が当時世人の関心をひいた事件や、時事問題、あるいは刊行物のなかから作品の題材のヒントを得たり、また読者がどのような読み物をもとめているかということについても注意を怠たらず、多分に読者の好奇心をそそり、時代の好尚に投ずる意図をもって作品を書いていたことなどを、さまざまな実例に照らして証明してみたい。そしてこのことは、従来多くの批評家が見なしたように、Poe が実生活においても非現実的、逃避的であって、時流に無関心であったという説への十分な反証を提供することにもなる。この種の説とはむしろ反対に、つねに書くことの効果、それは単なる芸術的効果にとどまらず、作品の商品的効果ということまで計算することを忘れなかったように見える Poe の合理家、実際家としての一面さえ見出すことが出来るのである。

1830年から40年代の南部の諸雑誌に現われた作品が、主観主義、理想主義、奇異なもの超自然的なものへの好みを現わし、その背景に現実をこえたはるかなる異国や、古い昔をえらぶのを好んだことはローマン主義的風潮の特長として当然なことであるが、たとえば、創刊後二年ほどの間に *Mesesenger* 誌上に毎月十篇余載せられた詩の主題はおどろくべき共通性をしめしている。もっとも好んで詠われた主題は、たそがれ時の墓詣で、若い女性の美、別離の悲哀、古代の廃墟、Byron、Napoleon、故郷という如きもので、これらの題材で Poe 自身が詠わなかったものはないといってよいくらいではないか。こころみに 1835 年十二月号の *Messenger* に載せられたソネット "廃墟" *Ruins*[19] から一節をあげて見よう。

Ye grey and mouldering walls ! ye ivied towers !
From whence the midnight-loving bird doth pour
Her dreary note upon the solemn hour !
Ye dim arcades——ye fancy-haunted bowers !
　Ruined but how majestic in decay !

これなど自然の風物をうたった浪漫的情調の典型的なものであるが、灰色の苔むした壁、葛のまつわりついた塔、深夜の鳥のわびしげな啼き声、小暗い拱廊、幻想のまつわる古色蒼然たる廃屋など、比較するまでもなく詩の語句、イメエジ、情趣いずれの点からいっても、Poe 自身の詩や散文のなかにこれらの特長が横溢していることに気づかれるであろう。

また 1839 年五月の *Messenger* には Virginia の一婦人の手に成る "予言" *The Prediction*[20] と題する物語が載ったが、主人公 Henrie は「メディチ家の遠い分家で、かつては増上慢をもって聞えたモントーバン男爵の唯一の末えい」なりといい、物語の展開とともに、占星術師だの、異端者だの、幽閉されて衰えてゆく奥方だのが登場し、予言や、奇怪な犯罪だの、密教的な表象

だのがあらわれる。こうしたお膳立てには、あきらかに Walpole や Monk Lewis に追随するゴシック小説の余韻が感じられる。当時の南部文壇には Hoffmann や Fouqué などドイツのローマン作家の怪奇と幻想に富んだ物語の影響をうけた、ゴシック風の物語が流行したが、これは勿論、超自然的なもの異常なものを求めるローマン精神の一つの発現にほかならない。そしてこのゴシック小説の流行に決定的な役割をはたしたのは Poe だったのである。アメリカにおけるこの派の小説の系譜をたどるなら、Poe よりも半世紀ほど前に Philadelphia のクエーカー教徒、Charles Brockden Brown が William Godwin の影響をうけたと見るべき、怪奇や憂鬱や神秘にみちた物語を書いている。Poe が少年時代に Brown の小説を読んで、その作品の雰囲気や題材や奇怪な人物から印象をうけたと想像することは不可能ではない。Brown がゴシック小説の歴史においてなしとげた注目すべき功績は、常套的なゴシック小説の趣向——古城や僧院、おとし戸や地下の窖、残忍非道な城主、迫害をうけてのがれる女性、また予言や前兆、幽霊などという荒唐無稽にちかい、道具だてやセンセーショナルな事件の過程をえがくにとどまらず、人間の魂の恐怖をおりこむことに成功したことだった。彼は恐怖や狂気をひきおこすような情況におかれた人間の心理や感情の分析をこころみ、人間の心のふかみを描き出すことによって、従来のゴシック小説の皮相浅薄なセンセーションの世界に奥ゆきをあたえた作家であり、その点ではあきらかに、Poe をはじめ、Howthore、Melville、James 等の先駆者というべきであった。

Poe の作品におけるゴシック趣味は短篇のみならず、詩のなかにも見出されるが、これは決して Poe の独壇場ではなく、Poe が当時の英米文壇の動向を敏感に把握して、読者の要求にかなうような趣向をえらんだ結果である。

そもそも詩を本領とした Poe ではあったが、詩を書くだけでは家族を養うはおろか、自分自身の口さえ乾上りかねない有様であったため、止むを得ず短篇に転じたのである。したがって詩は彼にとって、パッションであったろうが、短篇の場合は目的が他にあった。すなわち読者の興味をそそるような作品を書くこと、つまり売れゆきのよい作品を物することであった。そこで最初は *Blackwood* をはじめ英米の諸雑誌で人気のある作品の模倣からはじめ、これらの作品を茶化し、戯画化するつもりで書き出したのである。しかし、怜悧な彼はそこから短篇小説に対する独自の理論と方法をわり出し、また彼独自の色彩と雰囲気をもった物語の領域を開拓するにいたったのである。当時、英米で有力な文芸雑誌、即ちイギリスでは *Blackwood's* Magazine、*Bentley's* Magazine、*Edinburgh Review*、アメリカでは *Godey's Lady's* Book、*Mirror*、*Saturday Evening Post*、*Home Journal* 等の諸誌は、Poe の作品と題材や傾向のきわめて類似した作品にみちていた。たとえば疫病の蔓延とその恐怖を語る物語、探検旅行、催眠術、生きながら埋葬される話、天火のなかでやかれる話、溺れたり絞殺されて死ぬまでに感じたことを語る話等々。Poe は事実上これらの多くの作品からヒントを得たのだが、たとえば、彼の *The*

Pit and the Pendulum は *Blackwood* に載った三つの物語、*The Man in the Bell*、*The Iron Shroud*、*Involuntary Experimentalist* をやき直したものであり、さらに振子の鎌の刃の下に横たえられた主人公の恐怖感の精細な描写は C. B. Brown の *Edgar Huntley* の主人公が洞窟のなかで道を迷ったときの恐怖から示唆を得たのではないかと思われるほどよく似ている。

William Wilson は Irving の *An Unwritten Drama of Lord Byron's* のなかで語られる二重人格の話にもとづいている。また *The Premature Burial* は *Mademoiselle Victorine Lafourcade* のなかの、生きながら埋葬される記事に典拠があり、さらに *Some Words with a Mummy* は1832年一月廿一日に New York *Mirror* に掲載された *Letter from a Revived Mummy* からヒントを得たものと推定されている。*Messenger* に載った *Extract from a Novel That Never Will Be Published* のなかには、Poe の Legeia や Morella のプロトタイプとしか思われぬようなゴシック風なヒロインが出てくるが彼女は "hyacinthine curls" や "ruby lips" や "gazelle eye" をもち、断崖から落ちて不慮の死をとげる。そしてまた、次のような彼女の屍が横たえられた部屋の描写は、Poe 自身のヒロインの死を描いた場面に暗示をあたえはしなかったろうか？

> I entered the chamber where innocence and beauty had been wont to repose; around me were the trappings of the grave; the cold white curtains with their black crape knots, the shrouded mirror, the scattered herbs —— and stretched upon the bed motionless, lay a form —— the form of her whose living excellence was unsurpassed. My father came in; he took my hand, led me to the bed, and gently removed the sheet from the marble face. Oh, death, thou art indeed a conqueror ![21]

また Poe が *Messenger* に寄稿した *Berenice* は1823年 Baltimore *Saturday Visiter* に載った「人間の歯を手に入れる」ために墓をあばいたという記事から取材したものだが、この作品に関連して Poe が見のがすべからざる発言をしている事実をとりあげてみよう。

Poe はこの作品があまりにも horrible であるという T. W. White の評言[22]にこたえて手紙をおくっているが、それは、Poe が当時の雑誌のためにどのような種類の物語がもっとも望まれているかをぬかりなく計量しており、彼自身がいかにその要求に叶うような作品を書くことにつとめたかを明らかにするものであり、従って、彼が時代の趨勢に無関心であったという従来の批評の誤まりを証拠だてる材料としてきわめて重要な書簡である。

> A word or two in relation to Berenice. Your opinion of it is very just. The subject is by far too horrible, and I confess that I hesitated in sending it you especially as a specimen of my capability. The Tale originated in a bet

that I could produce nothing effective on a subject so singular, provided I treated it seriously. But what I wish to say relates to the character of your Magazine more than to any articles I may offer, and I beg you to believe that I have no intention of giving you *advice,* being fully confident that, upon consideration, you will agree with me. The history of all Magazines shows plainly that those which have attained celebrity were indebted for it to articles *similar in nature* to *Berenice*——although, I grant you, far superior in style and execution. I say similar in *nature.* You ask me in what does this nature consist? In the ludicrous heightened into the grotesque: the fearful coloured into the horrible: the witty exaggerated into the burlesque: the singular wrought out into the strange and mystical. You may say all this is bad taste. I have my doubts about it. Nobody is more aware than I am that simplicity is the cant of the day—but take my word for it no one cares any thing about simplicity in their hearts. Believe me also, in spite of what people say to the contrary, that there is nothing easier in the world than to be extremely simple. But whether the articles of which I speak are, or are not in bad taste is little to the purpose. To be appreciated you must be *read,* and these things are invariably sought after with avidity. They are, if you will take notice, the articles which find their way into other periodicals, and into the papers, and in this manner, taking hold upon the public mind they augment the reputation of the source where they originated. Such articles are the "M. S. found in a Madhouse" and the "Monos and Daimonos" of the London New Monthly ——the "Confessions of an Opium-Eater" and the "Man in the Bell" of Blackwood. The two first were written by no less a man than Bulwer —— the *Confessions* [were?] universally attributed to Coleridge —— although unjustly. Thus the first men in [Europe?] have not thought writings of this nature unworthy of their talents, and I have good reason to believe that some very high names valued themselves *principally* upon this speicies of literature. To be sure originality is an essential in these things —— great attention must be paid to style, and much labour spent in their composition, or they will degenerate into the turgid or the absurd. If I am not mistaken you will find Mr. Kennedy, whose writings you admire, and whose Swallow-Barn is unrivalled for purity

of style and thought〔,〕of my opinion in this matter. It is unnecessary for you to pay much attention to the many who will no doubt favour you with their critiques. In respect to Berenice individually I allow that it approaches the very verge of bad taste —— but I will not sin quite so egregiously again. I propose to furnish you every month with a Tale of the nature which I have alluded to. The effect—— if any——will be estimated better by the circulation of the Magazine than by any comments upon its contents. This much, however, it is necessary to premise, that no two of these Tales will have the slightest resemblance one to the other either in matter or manner —— still however preserving the character which I speak of.[23]

この手紙のなかで Poe は当時の読者にアッピールすると考えた物語を四つの種類、(1) グロテスクの域にたかめられた滑稽な話（ここで Poe のいうグロテスクとは戯作的、あるいは諷刺的という意味をもつと見てよいと思う）、(2) 身の毛をよだたせる迄に色づけされた恐ろしい話、(3) 茶番狂言にまで誇張された機智に富んだ話、(4) 奇異と神秘な域にまで作りなされた特異な話、とに分けているが、Poe 自身の書いた物語をそれぞれこの四項目に分類することも困難ではあるまい。たとえば *The Devil in the Belfrey*、*Loss of Breath* などは第一類に属するであろうし、*The Pit and the Pendulum* や *Berenice* は第二類に、*The Duc de L'Omellete* は第三類に、そして *The Fall of the House of Usher*、*Legeia*、*Morella*、*The Oval Portrait* などは第四類の項目に含められる筈である。この四項目のうち (2) と (4) にふくまれるべき Poe の物語にはゴシック的な要素がみとめられ、またこの種の、恐怖または怪異神秘を強調する物語こそは、当時もっとも流行の兆しのあった物語であった。しかも Poe のもっとも傑作といわれる作品の多くはこの範疇にぞくするものであることもたしかである。これに徴しても Poe の怪異物語は当時の流行のピークを形づくるものであったといっても決して誇張ではない。

これに関連して Poe は *How to Write a Blackwood Article* のなかで、同誌に載った物語のなかでモデルとすべき作品の例として、ふたたび *The Man in the Bell* を推賞し、さらに *The Dead Alive*、*The Confession of an Opium-Eater*、*The Involuntary Experimentalist*、*The Diary of a Late Physician* 等をあげて、"・・・Sensations are the great things after all. Should you ever be drowned or hung, be sure and make a note of your sensations——they will be worth to you ten guineas a sheet. If you wish to write forcibly, Miss Zenobia, pay minute attention to the sensations."[24] といっている。いわば、Blackwood を茶化した作品なのだが、如上の点は実は Poe が狙い所とした点なのだった。すなわち Poe は望ましい物語の又別の型として、異常に緊迫した短時間に経験される感情や感覚

を分析し、これをクローズアップして見せる種類の物語を推賞しているのである。そして彼自身も *The Pit and the Pendulum* や *The Premature Burial*、*The Colloquy of Monos and Una* 等の作品においてこれを実践し、非凡な成果をのこしたのである。この型にぞくする作品、たとえば *The Pit and the Pendulum* や *The Tell-Tale Heart* は先の第二類の戦慄的恐怖ををねらう作品にもあてはまるわけだが、たんなる恐怖の物語とも一線を画する領域をもっている。Convincing な心理や感情の解明にうらづけされぬ単なる恐怖は、馬鹿々々しさ、あるいは滑稽なこけおどしに堕する危険があり、これは多くのゴシック小説のいち早く葬り去られた理由であった。しかし、瞬間の異常なセンセーションに顕微鏡的レンズをあてて、肉眼には見えぬ心のひだひだを目の前に拡大して示し、"魂の恐怖"の真に迫る手法こそ、Poe がほり下げた独壇場というほかはなく、彼がアメリカの始祖 Brown の線を継承して、Dostoevskyi、James に跡をひく心理分析小説の領域に足がかりを作った所以はここにあった。

このように Poe の作品の源泉をさぐってゆくと、彼の作品には同時代のジャーナリズムを賑わしていた事件や、または同時代の雑誌刊行物に現われた物語から、事件や情況をさらには、タイトルにいたるまで借用している例が数知れずあることが分る。Poe は当時盛んに読まれた作品を検討して、前述のような幾つかの型を抽出し、原則化して、彼自身もこれに適用するような作品を書いていったのだ。従って、彼の作品に用いられている題材や趣向は独創からはほど遠く、彼以前のゴシック小説を特長づけている常套的な、ありふれた要素にすぎなかったといえる。城や僧院のある中世紀的な背景、苔やかびにおおわれた廃墟じみた庭や壁、迷路のような廊下、地下の秘密なぬけ道、ステインド硝子から射しいるおぼろげな光線、そのような陰鬱な雰囲気をもったゴシック建築の趣向に、邪悪な主人公、彼につきまとわれ迫害をうける美女、館にまつわる迷信と前兆、地下牢の幽閉、重々しい鉄扉のきしる響き、影のごとく出没する人物、宗教裁判や拷問、てんかん病の発作、妖術、失神等々というような悪魔的、神秘的要素を配することによって、ゴシック小説の狙う所は要するに血も凍るような恐怖をあたえることであった。Poe はそのような道具立てを選択し、巧妙に利用することによって彼の作品に Delacroix を想わせるような嗜虐的な情熱と死の痙攣にみちた陰惨なローマン的絵画美をあたえることに成功したばかりでなく、これらの背景に人間の pathological な内面の世界を組み合わせることによって、さもなくば機械的な配置に終りかねないゴシック的舞台を立体化し、象徴的表現の域にまで高めることにさえ成功したのである。

Poe の生きていた時代は Van W. Brooks がいうように、南部では人々が彼の周囲で"ゴシック的"に暮しており、「Poe が英国における幼年時代の学校を想い出させるような門や、先の尖った窓や、樫の天井のあるゴシック風な家を建てていた」[25] 時代であった。Mark Twain をして "little sham castle"[26] と指弾させる対象とはなったものの、南部では中世の城を模し

た塔や、胸壁や、ゴシック風の窓や扉のある建物が女子の学校としてしばしば使用された時代であった。このような建物はもともと南部の人々の中世趣味から生れたものだが、これは南部に一般であった騎士道崇拝の一端として、憧憬の対象となった女性を配置するのにいかにもふさわしい場所だったのではあるまいか？ Poe の作品のなかで Legeia や Morella や Madeline 姫などに具象化された、死んでもなお燃焼しきらぬ魂魄の執拗さを示す、学識、意志、情熱すべての点で主人公を威圧する女性像は、南部に一般であった女性崇拝、さらに言い得べくんば恐怖の感情のなかから生み出されたイメエジだったのではあるまいか？ そしてまた、生命の通うとも見えぬ、妖怪じみたこれらのヒロインはステインド硝子や、暗い廊下や、秘密な婦人の居室などのあるゴシック風な建物や、それに絡んだ聯想のなかから彫り上げられた心像ではなかったろうか？ たしかに Poe がいみじくも描いた死、狂乱、病気、残忍、荒廃、犯罪その他恐怖の感情を誘い出すゴシック的世界は当時の南部の人々の想像のなかに生きていたのだ。そして彼らの想像の所産として当時の文芸雑誌のページをみたした数多くの、Poe の作品に類似した物語の大半は歴史の霧のかなたに消滅してしまったのだが、Poe の作品のみはこれら類似の作品から蒸溜されたエッセンスとして、数知れぬ作品の最高峰として今日に生きのこったのだ。こうしてゴシック物語の大方がはりぼて式の妖怪談のように馬鹿々々しい話として、もはや近代の人々を興がらせる力を失ってしまった一方、Poe の作品がなお今日の読者の心を震撼させる魅力をたもっている所以は、Poe がゴシック小説の妖術や魔法に代うるに人間の pathology をもってし、いわゆる“ドイツ的な恐怖”にとどまらず、病める“魂の恐怖”を導入したことであった。従来のゴシック小説の域をこえて Brown がすでに道をそなえた異常心理や、破綻の一歩手前にある感情組織や、病的に過敏な末稍神経の蜘蛛の巣のようにはりめぐらされた、近代的な心象風景をあくことなくえがいて、その真実に肉迫している点であった。まことに Poe はゴシック建築ならぬ“人間の魂”の陽の光も通さぬ窖や、地下の秘密の通路へと分け入った作家であった。Poe の作品の主人公たちが悩まされた、モルヒネ患者の幻視幻聴に似た奇怪な幻想のとびかう世界、偏執症患者につきまとう固執観念のほかは、“現実との生きた接触”をうしなった世界、この nightmarish な世界のかもし出す恐怖はまぎれもなく Poe 自身のものだった。Poe の荒涼とした心象風景を雲のようにおおうている憂鬱、不安、孤独、寂寥、悲哀、サディズム、それらはすべて Poe がほこった理性の力では如何ともしがたい崩壊への予感と恐怖をはらんでいた。Poe がもし、余人の追随をゆるさぬ理知の計量と技術の力とでこれらの作品を構成したにせよ、彼のえがいたあの分裂症的な心象風景から迫る鬼気のみは Poe の計算のなかには含まれていなかったものだった。それは、火の山“Yaanek”から流れ下る溶岩（ラヴァ）のように、彼自身の魂からおのずと迸り出たものだったからである。かくて一方に反撥と嫌悪を感じさせる要素をもちながら、なお読者をひきつける独自性を彼の作品にあたえているのは、Poe 自身が身をもって発見したこの近代的人格の分

裂崩壊という主題であり、またこの困難な主題を、あたかも自分の傷口からふき出した膿汁の精密検査をする医師のような、冷やかな論理的分析的頭脳の働きによって処理し、表現をあたえた点にあったのだ。

結　　語

文学者としての Poe を形成し、彼の作品に何らかの影響を印したであろう文学的な背景、彼と他の作家や作品との関係などについては未知の分野が多く、これを徹底的に明らかにした研究はきわめて少ない。また、その研究をすすめるためには Poe が生きていた当時の幾つかの町々の文化的社会的背景、当時の新聞雑誌その他の刊行物から直接の資料をあつめる必要があり、アメリカ国外の研究者には至難な道である。しかし少なくとも、Poe とその時代や環境との関係をよりふかく探求することによって、従来のPoeの観方にはなお訂正される面が多々出てくると思う。事実、Poe が死んでから一世紀余の間に Poe の評価には大きな変遷があった。Ingram、Woodberry、Campbell、Harrison、Quinn、Stovall、Mabbott 教授らの実証的な調査研究の結果、半世紀近くおろそかにされていた Poe の未知な重要な面が明るみに出されて、従来 Poe の肖像をゆがめもしていた伝説的な Poe 観は次第に訂正されつつある。事実 Poe は Griswold のえがいたような悪魔的人物でもなく、アメリカという「ガス燈にかがやく巨大な蛮境」の犠牲となった悲運の天才というのも誇張にきこえる。彼はたしかに本職の芸術家にとっては生きづらい十九世紀前半のアメリカで、生きる糧をうるために奔走し、世間的野心や人間的煩悩にもかり立てられながら、生きかつ書いていた一個の人間らしい人間にほかならなかった。そして私にいわせれば、Poe は決して時代や環境に無縁などころか、あの当時の南部の文化的社会的環境の産物に外ならず、むしろ時代の空気に人一倍鋭く反応しながら生きていた人だと思う。文学者としての彼は、十九世紀前半の南部の新古典主義と新興のローマン主義が交替しようとしていた過渡期の作家であり、このことは彼自身のなかにも主知性と浪漫性の二つの相反する傾向が共存していることに表われている。彼の作品の調べはあきらかに彼自身のものであると同時に、彼の生きていた時代のムードの所産にほかならぬことは前章においてもふれた通りである。彼のなかに流れているのは南部の血であり、彼の想像や感受性はたしかに南部的なものである。Poe の作品中の人物をかりてしばしば表現される、現実生活からの逃避や、とめどない夢想への沈潜、暴力への衝動、*William Wilson* や *The Cask of Amontillado* に見られる放埒や残忍性、ヘドニズムなどには南部的な匂いがしないであろうか？　Poe の詩の単調な、反復の多い hypnotic な韻律には、彼が幼時聞き馴れて育ったであろう黒人の霊歌のリズムがひびいてはいないであろうか？　彼の weird な想像の世界には、幼時ニグロの召使らの間で聞いた陰気でグロテスクな妖怪談や伝説の

想い出がしみこんでいるのではなかろうか？ *The Fall of the House of Usher* のなかでいみじくも描かれた、罪や秘密を暗示するような陰湿な沼や館は、奥南部辺りの森林や沼沢池の風景を連想させないであろうか？ Usher の館の軒から蜘蛛の巣のようにたれ下る菌類 fungus をえがく Poe の脳裡には南部には珍しくない樫の木に寄生する、あの灰色の妖怪じみたスペイン苔 Spanish moss が映ってはいなかったろうか？ Usher の館のみならず、主人公自身の額に絹糸のようにふわふわ漂っている髪の毛にまでも私はそれの暗示を感じる。あの Spanish moss のあたえる印象はまさしく腐朽と荒廃のそれである。

Poe の文章の感傷的な誇張癖、修辞学的な関心のつよさ、絢爛たる美文体、それらもまた南部の持味なのではなかろうか？

Poe の時代や環境に対してもっている意義は、彼が文壇の流れの上に突如現われた孤独の慧星のごとき存在であったということではなく、彼があの当時の文壇の人々が試みてもなし得なかったことを彼が成就したということにある。それまでにすでにポピュラーであった材料を混ぜ合わせたり、練りかえしたりして、彼秘蔵の燐光色のうわ薬をかけて仕上げたのが彼の作品だった。彼は「創造するとは要するにつなぎ合せ結びつけることだ」といい切れるほどシニカルで意識的な artist であった。それ故にこそ、彼の幾つかの作品は、細工のあとも見えぬ天然の珠玉のごとき冷瓏たる作品となったのだ。すなわち彼の偉大さは、使い古された材料をつかって、しかも他の何人も及びがたい水準にぬきん出て "Edgar Allan Poe の芸術" を決定したことであった。さらにいいかえれば、時と所をふまえながら、しかも「時と所をこえた」作家となったことであった。

註

(1) 東京女子大学附属比較文化研究所「紀要」第十巻、昭和三十五年十一月.

(2) Poe, Works, XIII, 172.

(3) *Southern Literary Messenger*, December, 1852.

(4) *Ibid*, I (August, 1834), 1.

(5) *Ibid.*, 1.

(6) *Ibid.*, II (January, 1836), 133.

(7) "Supplement", *Ibid.*, II (April, 1836), 343.

(8) Cash, W. J., *The Mind of the South*, 46-47.

(9) Landrum, Grace W., "Sir Walter Scott and His Literary Rivals in the Old South," *American Literature*, II (November, 1930), 256-276.

(10) Richmond *Enquirer*, July 1, 1823.

(11) Anon., "Poe's Student Days at the University of Virginia," *The Unvailing of the Bust of Edgar Allan Poe in the Library of the University of Virginia*, 13.

(12) Osterweis, Rollin G., *Romanticism and Nationalism in the Old South*, 48-49.

(13) Fiedler, A., *Love and Death in the American Novel*, 162.

(14) *Ibid.*, 162.

(15) Works, XVI, *Marginalia*, 99-100.

(16) *Southern Literary Messenger*, III (May, 1837), 223-224.

(17) Wordsworth, "Stanzas : Composed in the Simplon Pass," (1822).

(18) Campbell, K., "The Origins of Poe," *The Mind of Poe and Other Studies*, 156.

(19) *Southern Literary Messenger*, II (December, 1835), 223-224.

(20) *Ibid.*, V (May, 1839), 331-340.

(21) *Ibid.*, I (October, 1834), 49.

(22) *Ibid.*, I (March, 1835), 387.

(23) Original Autograph Ms. Fragment, Huntington Library.

(24) Works, I, 274.

(25) Brooks, V. W., *The World of Washington Irving*, 353.

(26) Twain, M., *Life on the Mississippi*, 332.

参 考 書 目

The Complete Works of Edgar Allan Poe, ed. by James A. Harrison, 17 vols., New York, 1902.

Campbell, Killis, *The Mind of Poe and Other Studies*, Harvard.

Quinn, Arthur Hobson, *Edgar Allan Poe : A Critical Biography*, Appleton-Century-Crofts. New York, 1941.

Jackson, David K., *Poe and the Southern Literary Messenger*, The Dietz Printing Co., Richmond, Va., 1934.

Brooks, Van Wyck, *The World of Washington Irving*, The World Publishing Co., New York, 1944.

Cash, W.J., *The Mind of the South*, Alfred A.Knopf, New York, 1944.

Clark, Harry Hayden (ed.), *Transitions in American Literary History*, Duke Univ. Press, Durham, North Carolina, 1953.

Hubbell, Jay B., *The South in American Literature*, Duke Univ. Press, 1944.

Osterweis, Rollin G., *Romanticism and Nationalism in the Old South*, Yale Univ. Press, New Haven, 1949.

Varma, Devendra P., *The Gothic Flame*, Arthur Barker Ltd., London, 1957.